# 「骸骨ビルの庭」展 一問一答

宮本輝氏に「骸骨ビルの庭」にまつわる背景やエピソードなど、ミュージアムからの質問にお答えいただきました。

**宮本さんが持っておられる「十三」のイメージや、作品の舞台に十三を選ばれた背景を教えてください。**

大阪市を北と南に分けるとしたら、十三というのは大阪の北端の最もカオスみたいなところ。梅田と十三の間には、淀川という非常に大きな川があります。十三という街は、混沌としている中に「梅田から見た十三」「十三から見た梅田」、ちょうどその間に夢幻能の観客席と舞台があるというのを感じたとき、十三側の淀川のほとりに骸骨ビルを作り上げようと決めました。

私も大阪の福島区で暮らしたことがあり、十三の土地勘もよく分かるし、住んでいる方々の気質というのも知っていました。

**「にぎやかな天地」の作中に語られたエピソードが本作執筆のきっかけということですが、なぜそのエピソードを一冊の小説にしようと思われたのですか。**

「にぎやかな天地」を書いたときは、主人公の青年に発酵食品の本を書き終わったあとの次の本の題材を与えるためだけに、「育てた戦災孤児に無実の罪をきせられて、そのまま亡くなった人がいる」という設定を作りました。それは「にぎやかな天地」の中のひとつの小さなエピソードだったんです。

書き終えて単行本になって読み返したときに、そういう男性とそういう事件を作って、僕がそれを一本の作品にしてみようと思いました。「骸骨ビルの庭」というのはそこからできたんです。

**杉山ビルヂングを「骸骨ビル」と名付けた背景を教えてください。**

「白百合ビル」というわけにはいきませんしね、やっぱり小説のタイトルとして多少のインパクトがないといけません。子どもの頃住んでいた安治川付近のビルには物干し場がなかったので、母親が屋上に物干し場を作ったのですが、当時は竹竿ですから風にあおられたりすると飛んでいくんです。ちょうどその下がバス停だったので、下手したらバス停の人の頭上に落ちかねない。それを飛ばないようにするために父がいろんな工夫をして、ちょうど四角い屋上からいろんな棒が突き出てるような形になりまして、親父が下から見上げながら「骸骨みたいやな」って言ったんですよ。それがなぜか頭の片隅に残っていました。

**骸骨ビルの住人たちはとても個性的です。モデルがいた人物もいるのでしょうか。**

モデルがいるのはナナちゃんです。富山の北日本新聞の文学賞の選考委員をやっている関係で、年に一度若い記者たちと一緒に富山にあるオカマバーに行くんですが、そこの「女の子」の生い立ちや男性の好みはナナちゃんのモデルになっていますね。色々とその世界のことを教えていただきました。とても頭がよく、綺麗な方です。

**多くの登場人物の中で宮本さんにとって一番思い入れが深い人物は誰でしたか。**

やっぱり阿部轍正と茂木泰造、この二人でしょう。私はとても重要なことは難しく表現したくないんです。茂木がまだ若い頃、阿部が骸骨ビルで子供たちを育てるのはもうやめよう、俺たちには無理だと言った時に、「自分のことを考えての苦労やから苦労と感じるんやないのか」と言うセリフがあるのですが、これは非常に重要なセリフなんです。だけどそれを大阪弁で書くと、おそらく読んだ人はさほど重要な言葉だとは考えないと思うんです。

読んでいたらすっと読み流してしまうような文章の中にどれだけ深いものを入れていくか、自分としてはそういった文章を阿部と茂木との会話や言葉の中でかなり使ってます。

**物語が日記形式で展開されていきますが、この日記形式という方法は執筆当初から決めておられたのですか。**

当初は決めていませんでした。でも「さぁいよいよ書き出すぞ」となったときに、登場人物が多い物語ですので、一人称二人称だろうが三人称だろうが通常の書き方だと物語が拡散しすぎる。これはやっぱりヤギショウ一人に喋らせた方がいいなと思ったんです。ところが、「喋る」というのは独白になりますから、これだけのリアリズムの様式で、リアリズムから離れるわけにはいかない。そうすると、独白体として一番リアリティを持つのは日記体だなと思ったんです。よく考えたらこのヤギショウさんは暇で、日記書く時間山ほどありますからね。

**執筆前の作家の想定を超えて動き出した登場人物や物語の展開はありましたか。**

そんなのばっかりです。私の場合はそうやって小説が動いてるんです。ヤギショウが骸骨ビルに来て翌日に突然手紙を渡されますよね。あの場面を書くその瞬間まであんなものが出てくるとは思わなかったですね。大きな骨格みたいなものがあって「こういう物語を書こう、そこには自分のこういうテーマがあるんだ」というのを基に書き出すと、そういう流れになっていくんです。物語の最後もできていなかったですね。どうやって終わろうか、もう見切り発車です。

**ビルの庭で野菜を育てるシーンはとても具体的でしたが、宮本さんは畑仕事のご経験はありますか。**

全くないです。僕のホームドクターが、自分で田舎に畑を借りて有機野菜を作るのに凝っていまして、毎月往診に来る度にその苦労話をするんですよ。一週間手入れしないと畑がどうなるかとか、害虫のはびこり方とか。そういう話が頭に入ってたんです。

野菜を育てるっていうのはやっぱり時間がかかります。ジャックと豆の木じゃあるまいし、さっき撒いた豆が天まで届くわけじゃないので、やっぱりそれには手入れをしてあげなければならない。野菜ひとつを作るのも時間と手間隙がかかるっていうのを骸骨ビルの子供たちは自然と学んでいくわけですね。

どれだけ人間が手塩にかけてもだめなときはだめです。自然の摂理というか自然の裁きというか人智に及ばないような中で人間は生きているんだということもまた、骸骨ビルの子供たちは自然に学んでいったのだと思います。

**作中には「みなと食堂」のメニューをはじめとして多くの美味しそうな料理が登場します。料理の作り方について、何か参考にされたものはありますか。**

料理は好きですからね。たとえば雑誌なんかでレシピが書いてあると手帳に控えたり、ちょっと自分もやってみようかと夜中にごそごそやってみたり。でも片付けものが嫌いでして、翌朝必ず家内に怒られるんです（笑）。美味しそうなものを見ると「どうやって作るのかな」と思いますし、レストランに行ったら「これはどうやって焼くんですか」と聞いたり、そういういろんな情報が引き出しに入っているんです。

作中では「みなと食堂」に合った家庭料理なら、例えばどんなものがあるかなと料理番組を見て参考にしたりしました。長編小説ですから、小説の中にぽつんぽつんと花びらを散らすみたいにして、面白みや楽しみの部分を加えました。たまたま「みなと食堂」の場面を書いてるときにおなかが減っていて「今日は鯖の味噌煮が食べたいな」と思うとそのメニューがでてきたりしています。

**ナナちゃんが彩子ママから薦められて読んだという数々の本は、宮本さんにとってどんな作品群なのでしょうか。**

私が浪人時代に読んだ作品です。それはもう膨大な数です。勉強もせずに本ばっかり読んでいたわけですから、全部足したら160何篇かになります。その中で思い浮かんだものを書きました。これは読んでおいた方がいいという入門書みたいなものです。誰かが言った言葉ですけど、自分がちょっと頑張らないと読めないなという書物に接するべきですよ。ちょっと背伸びしなきゃ。上がろうとしないと。

ナナちゃんの話の中で能の曲趣の一つ「夢幻能」が登場しますが、宮本さんも能をよくご覧になるのでしょうか。また、宮本さんが好きな古典芸能を教えてください。

最近は見に行かなくなりましたけど、中高生のときによく父に連れて行かれました。今思うと咳ひとつできないようなところで難行苦行でしたけど、中高生でもやっぱり見ているうちに惹かれるんですね。シテ方がすっと出てきてぴたっと止まって、囃子方が雨だれみたいにポンっと鼓をうつと、それっきり全く何の音もしない、シテ方も動かない。息づまるような静なんですよね。

「どうなってるんだろう、なにが始まるんだろう」と思っているとすっと動き出すところ、あの動き方が見たくて最後は喜んでいくようになってましたね。父の耳元で「なんでこの人、長いこと止まってんの、お父ちゃんこの人いつ動くの」って聞いても、父もわからんから「秘すれば花じゃ」って言ってごまかすんです。「なんやねんそれ」って(笑)。

古典芸能だと落語が好きですね。私は5代目古今亭志ん生が好きで、iPodには約70演目が入っています。毎晩一席だけ聞いて寝ています。昭和31年から32年頃にかけてラジオで寄席中継っていうのが始まりまして、そのときの録音CDを買い集めまして、全部iPodに入れています。

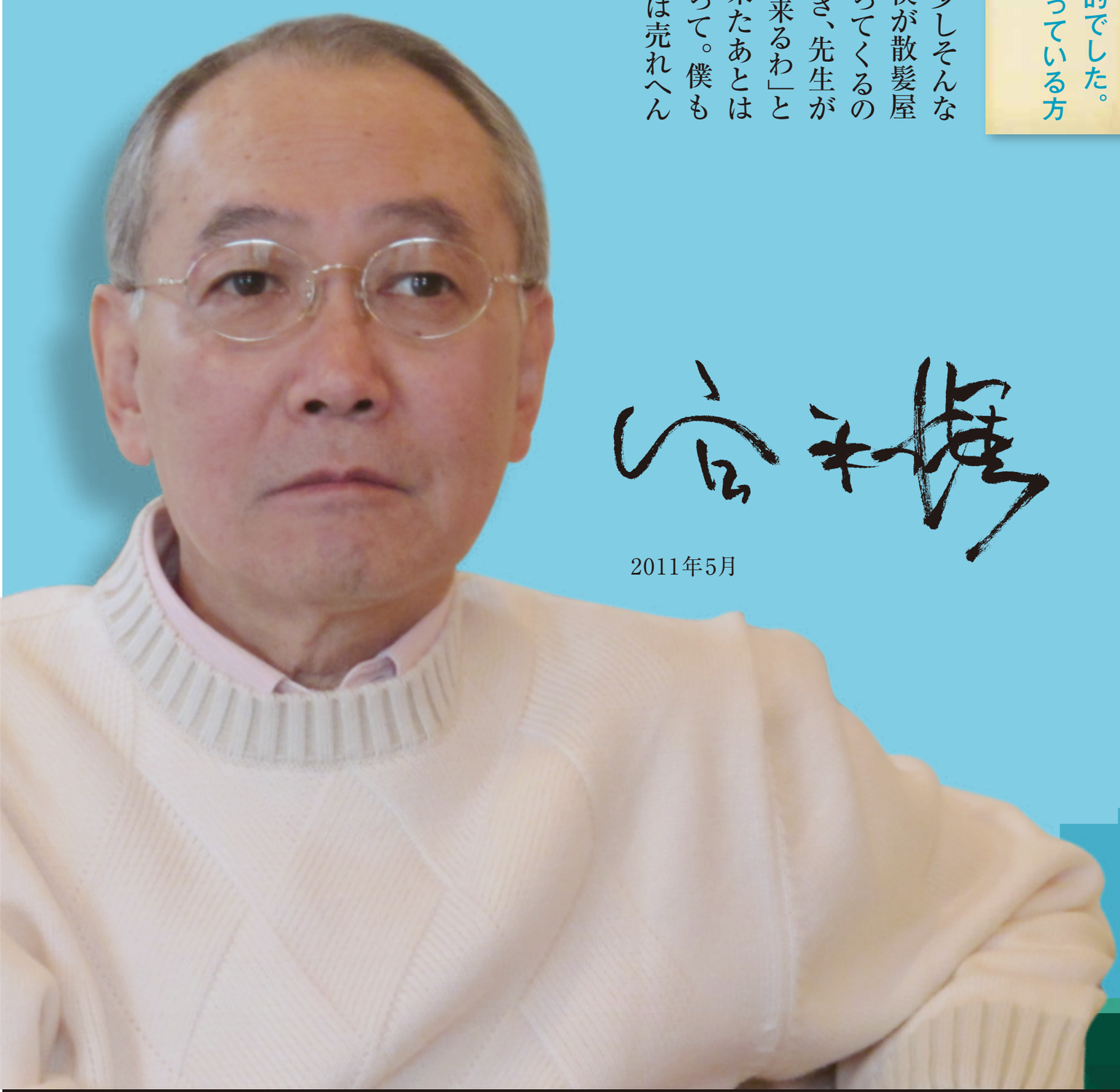
この作品では太平洋戦争の大阪空襲や戦後の混乱期のことが描かれています。宮本さんは戦後生まれですが、幼少期を過ごした中で印象に残っている「戦後」とはどのようなものだったのでしょうか。

私は昭和22年生まれですから、戦後生まれ。町内で小学校6年生とか中学生ぐらいの子は戦争中に生まれた子でした。その子たちと僕たちって大きな差異があるんです。彼らは本当に物のない時代に生まれて、芋のつるみたいなものを食べて疎開してた生活があったり、戦争の色や傷跡がものすごく残っていました。父親が戦死して帰ってこなくてもう昭和30年近くなっているのに、まだ「俺のお父ちゃんは生きてるねん」と父親の帰りを待っている子もいました。

僕もその頃大阪の安治川の入り口付近の「骸骨ビル」のようなビルに住んでいました。作中の「骸骨ビル」と同じく非常に丈夫な3階建てのビルです。どういうわけかそれが戦後に焼け残って、しばらく当時の進駐軍が接収して何かに使っていたんですね。階段も広いし、頑丈なビルです。高速道路作るために取り壊してしまって、今はその場所はもう高速道路の入り口になっています。

作品中に登場する「福徳」という言葉が印象的でした。周りの人を幸せにするこんな不思議な力を持っている方が宮本さんの周りにもいらっしゃいますか。

そういう人はたしかにいますよ。僕にも少しそんなものがあるかもという気がします。例えば僕が散髪屋に行くでしょ。そしたら急にお客さんが入ってくるのだそうです。ある針灸院に疲れて行ったとき、先生が「宮本さんが来てくれはった、今日はお客さん来るわ」とおっしゃって。何のことかと訊ねたら「僕が来たあとは必ず5人か6人お客さんが来るんです」って。僕も知らなかったんです。それならなんで僕の本は売れへんの、って言うてますけど(笑)。



2011年5月